

コロナ禍における学修サイクルを取り入れた老年看護学オンライン授業の取り組み—教員の振り返りからみえたこと—

Online Geriatric Nursing Class Initiative Incorporating a Learning Cycle during the COVID-19 Pandemic—Observations from teachers' reviews

徳永しほ, 大塚真理子, 出貝裕子, 成澤健, 大橋幸恵

Shiho Tokunaga, Mariko Otsuka, Yuko Degai, Ken Narisawa, Yukie Ohashi.

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

老年看護学教育, オンライン授業, 学修サイクル, グループワーク, 反転授業
Geriatric nursing education; on-line lessons; learning cycle; group work; reverse lessons

【Correspondence】

徳永しほ
宮城大学看護学群
tokunagas@myu.ac.jp

【COI】

本論文に関して, 開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2021.6.10

Accepted 2021.8.9

Abstract

Two geriatric nursing classes conducted during the COVID-19 pandemic adopted a learning cycle consisting of pre-learning, individual work, group learning (live), and post-learning, using on-demand educational materials (online classes). This paper aims to clarify the advantages of, and issues related to the geriatric nursing online class initiative based on teachers' review, and to examine their utilization for future class management.

This initiative has the following advantages: students can learn independently and according to their level of understanding and learning speed; improvement in the observation ability of the elderly; reduction in absenteeism; and examination of methods to actively participate in group learning and improvement of their implementation. One reason for students' independent and active learning seems to be the teacher-student interactivity in which teachers participated in live group-work and provided feedback on response cards and students' individual work. This initiative became a realization of the reversed class, and its benefits were probably obtained.

However, there were some of challenges that arose. First, the emergence of differences among students due to their respective net environments and levels of ICT literacy. Second, compared to conventional classes, the online geriatric nursing class initiative required more than thrice the number of teachers and amount of time required for class preparation.

In order to develop the learning cycle in future face-to-face lessons, it will be necessary to examine management methods.

はじめに

2020 年に入り、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の急拡大の影響により、本学は 2020 年 4 月上旬に開始予定であった新学期オリエンテーションを中止し、学生の大学立入を禁止した。新学期オリエンテーションおよび授業はオンラインを活用した遠隔実施とし、学生のオンライン学修の環境整備、オンライン授業の準備を行った上で、4 月下旬よりオンライン授業が開始された。

本学では、2017 年度入学生から全学群でノートパソコンが必携となった。この機会に老年看護学領域では 1 年次後期科目から電子書籍システム（VarsityWave eBooks: 以下、電子本棚）を導入した。老年看護学の科目は、1 年次に小児・成人・老年のオムニバス科目であるライフステージ看護学概論Ⅰがあり、2 年次に老年看護援助論Ⅰ（前期 2 単位）、3 年次に老年看護援助論Ⅱ（前期 2 単位）、老年看護学実習（後期 3 単位）があり、いずれも必修である。2017 年度入学生から段階的に全授業で教材の電子化と新しい講義方法の開発を開始した。具体的には、電子本棚に、電子教科書と超高齢者の日常生活を撮影したオリジナル動画、講義資料を配信して授業で活用した。学生には、自身のノートパソコンまたはスマートフォンに電子本棚専用のアプリケーションのインストールをするよう指導し、電子教科書か従来の書籍のいずれかを購入するよう指導した。電子本棚の使用は 5 年目となる。年々、学生はパソコンを使用した授業に慣れてきており、電子教科書の使い方にもそれぞれ工夫していることが伺える。

老年看護学領域にとって、コロナ禍でのオンライン授業は、電子教科書を使った授業方法をさらに発展させる機会となった。

目的

学修サイクルを取り入れたオンライン授業の取り組みについて、教員が捉えた利点と課題を明らかにし、今後の授業運営への活用を検討すること。

取り組みの概要

1. オンライン授業で使用したツール

新型コロナウイルス感染症拡大防止によるオンライン授業への移行後は、電子本棚の活用に加え、PowerPoint に音声録画しビデオ作成した授業動画をオンデマンド型配信するためのツールとして、Microsoft Teams（以下、Teams）と Stream を使用した。Teams は、遠隔でのリアルタイムのコミュニケーションツールとしても使用した。その他に、授業後のレスポンスカードや課題の提出先として、Moodle を使用した。

2. ワークシートの作成

授業を通して学生が思考整理を行うための教材として、以下の記録用紙を作成した。

1) 事前課題・事後課題用個人ワークシート

授業ごとに「事前課題」「事後課題」を Excel シートに 1 枚、全 15 回分を Excel ファイルにまとめたものを事前課題・事後課題用個人ワークシート（以下、個人ワークシート）として活用した。

内容として、事前課題（事前学修）は、授業ごとに指定された教科書の内容を学修した上で回答できる記述問題または穴埋め問題を提示した。また事後課題（事後学修）は、授業を踏まえて再考した事例検討内容を記載するなど、授業内容に合わせて提示した（表 1）。

表1 事前課題・事後課題用個人ワークシート

第●回 高齢者の入院～退院の経過に応じた支援

事前課題 教科書を参考にして空欄を埋めてください。		
教科書②p266-279		
・加齢変化により影響を受ける検査値の内、肺活量、1秒量、ヘモグロビン等は加齢により（ ）する。 残気量、クレアチニン、尿素窒素等は（ ）する。 ・高齢者は治療上の安静から（ ）や（ ）を起こしやすいため、可能な活動性の維持・向上に努める。 ・自宅退院が困難となりやすい高齢者の特徴として、継続的な（ ）が必要であることや（ ）の低下といった身体機能、認知機能障害やうつ傾向といった精神機能の他に（ ）（ ）等も影響する。 ・高齢者を支えるサービスは多様である。主な相談窓口としては（ ）（ ）（ ）である。		
【1】堀内ふさ、大淵律子、諏訪さゆり、ナーシング・グラフィカ 高齢者看護の実践 老年看護学②、株式会社メディカ出版、2017、p 266-279		
個人のメモ：Aさんの退院支援について検討する		
総合的に目指す姿 (退院時・退院後)	退院に向けて必要な援助	具体的な援助計画
事後課題：Aさんの退院に向けての支援計画について、グループワーク・共有を経て、自分の立てた計画に取り入れようと考えた内容		

2) 看護過程展開用記録用紙

授業で取り扱う紙上事例の看護過程を展開する際のアセスメントシートや看護計画用紙を Excel ファイルにまとめたものを看護過程展開用記録用紙として活用した。

3) グループワークシート

グループワークの際に検討内容を記録するための共有ファイルである。グループワークシートは、Teamsまたは電子本棚より配信した。なお、グループワークの際に学生がそれぞれのデバイスから同時に入力することができ、リアルタイムで他の学生の入力内容も表示される設定とした。

3. 個人ワークと集団学修を組み合わせた学修サイクルの構成 (図1)

1) 学修サイクル

授業構成は、事前学修 (事前課題)、個人ワーク、集団学修、事後学修 (事後課題) とした。さらに事前学修から事後学修までの一連を学修サイクルとして、毎回の授業を以下の①～⑥の流れで実施した。

①～③は個人ワークであり、学生はグループワーク開始時間までに各自のタイミングで学修を行う内容とした。また④～⑤までは集団学修であり、学生は指定された時間にオンライン上で集まり、グループワークを行う内容とした。その後、⑥の事後学修を各自で行うまでの過程を1回分の授業とした。

①事前学修 (事前課題)

学生は電子教科書の指定ページの内容を学修し、その上で個人ワークシートの「事前課題」に提示されている知識問題を回答する。

②オンデマンド型の授業動画の視聴 (30分程度)

学生は Teams と Stream にオンデマンド型で配信されている授業動画を視聴する。授業動画とは、教員が PowerPoint に音声録音してビデオ作成したもので、事前学修に対する解説内容の授業動画 (10～15分) と、必要な知識の授業動画 (10～15分) である。

③超高齢者の日常生活を撮影したオリジナル動画の視聴（10～15分程度）

超高齢者の日常生活を撮影したオリジナル動画（以下、超高齢者の日常生活動画）とは、電子本棚上にオンデマンド型で配信されている教材動画である。対象 A 氏の生立ちから自宅での日常生活場面、通所サービスや診療所での受診場面をありのままに撮影した所要 30 分のオリジナル動画である。学生は单元ごとに教員から指示された動画の場면을視聴して、高齢者の生活や健康状態をアセスメントする。

④グループワーク（30分程度）

グループの構成は、1グループ5～6名とした。学生は指定された時間に Teams のグループチャネルに分かれて集まり、グループワークを行う。学生は、②と③を踏まえて、WEB 会議機能を利用してリアルタイムで意見交換を行いながらグループワークを実施する。

このとき学生はそれぞれのデバイスから共有されているグループワークシートにアクセスし、ビデオ通話やチャットで意見交換を行いつつ、リアルタイムに表示されている他の学生の書き込み内容も確認しながら、グループメンバーと協力して思考を深めていく。

⑤授業へのレスポンスカードを提出

グループワーク終了後、学生は授業を通しての学びや授業に対する意見・質問などを Moodle に匿名で投稿する。

⑥事後学修（事後課題）

授業終了後、学生は個人ワークシートの事後学修部分を各自で行う。

2) 授業中での教員の関わり

教員は单元ごとに授業動画の冒頭に授業目標を提示し、学生が学修サイクルを通して目指す学修ビジョンを明確化した上で学修に取り組めるようにした。

また、教員はグループワークの際に、複数の教員で各自担当グループの Teams チャネルに入り、グループワークの様子を観察しながら、授業の課題に対して学生同士が議論を深められるよう、情報提供や思考整理の支援などを行った。そして授業終了後に、教員はレスポンスカードやグループワークの内容を確認した上で個別対応や補足動画を作成し、学生へフィードバックを行った。

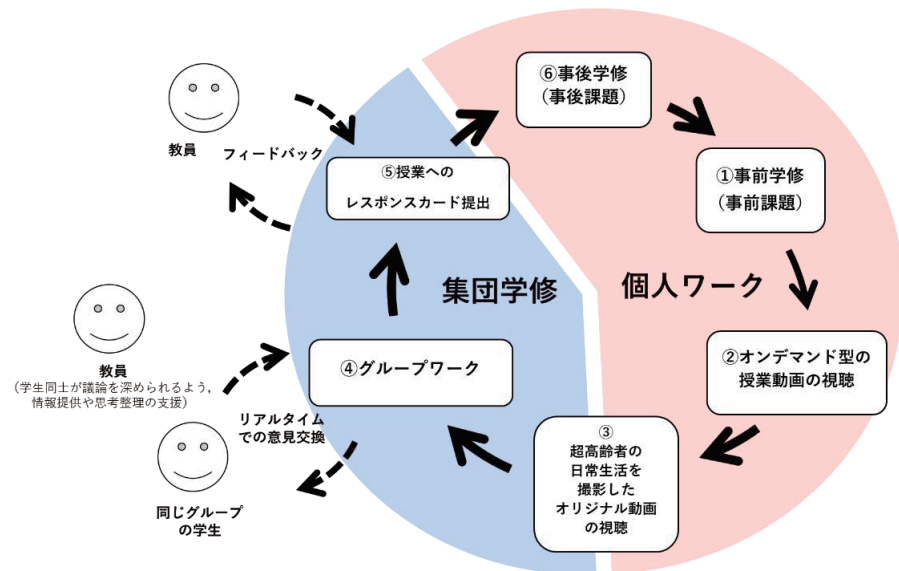


図 1 個人ワークと集団学修を組み合わせた学修サイクル

データ収集方法

教員が捉えたオンライン授業での学生の学修状況や、学修サイクルを展開させるための工夫及び

課題をデータとし、老年看護学の担当教員6名から収集した。担当教員からの意見は、Teams上にデータ収集用のExcelファイルをアップロードし、担当教員の都合の良い時間に、自由に無記名で意見を入力してもらった。なお、授業終了後の6か月後から約1か月間の期間でデータを収集した。

倫理的配慮

科目責任者および授業担当教員で、実践報告として公表することに同意のもと、各教員からのデータ収集は自由意思のもと無記名で行い、教員間の匿名性を確保した。本報告において、学生の記録物や言動などの固有の情報は取り扱わないものとした。

結果

得られた意見を類似性に基づき分類しカテゴリー化した結果、カテゴリーは、1. 個人ワークに関する意見、2. 集団学修に関する意見、3. 学修サイクルを展開させるための教員の取り組みに関する意見、4. オンライン授業に関する課題、の観点で分類された。

以下、カテゴリーを【】で示す。

1. 個人ワークに関する意見（表2）

教員は、個人ワークに対し【学生が自分の理解度や学修スピードに合わせて主体的に学修できる】、【高齢者に対する観察力の向上】と捉えていた。

表2 個人ワークシートに関する意見

カテゴリー	教員が感じたこと・思ったこと・教員の工夫など
学生が自分の理解度や学修スピードに合わせて主体的に学修できる	オンデマンド型による授業動画の配信により、学生は過去の授業の動画を見返して復習することができる
	学生はオンデマンド型による動画を使用した授業で学修を進めることができている
	学生は自分のペースで個人ワークの学修に取り組むことができている
	一部の学生は必要に応じて授業の動画を早送りして学修している様子があった 一部の学生は授業の動画を一時停止したり、巻き戻したりして活用して学修している様子があった
高齢者に対する観察力の向上	授業を通して超高齢者の日常生活を撮影したオリジナル動画を何度でも繰り返し視聴することで学生の観察力が付いてきた

2. 集団学修に関する意見（表3）

教員は、集団学習に対し【欠席者の減少】、【能動的に集団学修に参加する方法の検討と実施力の向上】がみられると捉えていた。

表3 集団学修に関する意見

カテゴリー	教員が感じたこと・思ったこと・教員の工夫など
欠席者の減少	学生の欠席が殆どなくなった
能動的に集団学修に参加する方法の検討と実施力の向上	学生は教員のファシリテータがなくともグループワークでそれぞれ課題に対して取り組むことができていた
	オンラインシステムの使用に慣れていない中でも工夫しながら学生同士でグループワークに取り組む様子がみられた
	グループワークでは話すだけではなくチャットで意見を共有している学生の様子がみられた
	グループワークでは教員が準備した方法以外に自分たちが遠隔でも円滑に意見交換や作業ができる方法を探し、それらを活用してグループワークに取り組もうとする学生の様子がみられた

3. 学修サイクルを展開させるための教員の取り組みに関する意見（表4）

教員は、学修サイクルを展開させるために授業の準備において、【学生の学修意欲の維持を図る教材作成の工夫】と【オンラインの利点を活かした教材作成の工夫】をしており、授業中は【学生の反応をすぐに授業改善へ反映させる工夫】を行っていた。

表 4 学修サイクルを展開させるための教員の取り組みに関する意見

カテゴリー	教員が感じたこと・思ったこと・教員の工夫など
学生の学習意欲の維持を図る 教材作成の工夫	授業動画の作成では、動画時間も考慮しながら単元目標の達成に向けた教育内容となるよう一層吟味した
	授業動画の作成時に、動画内でどうしたら強調できるか、声のトーンやスピードなど授業の伝え方の工夫がより重要だと感じた
	学生が授業動画を観て飽きないように、途中で例示を挟んだり、メリハリを付けようと、いつも以上に意識して教材作成を行った
	学生はオンラインシステムに慣れていないため、その中で円滑に学修に取り組めるよう、使用するシステムはなるべく統一、単純化する工夫を行った
	学生へ課題が過負荷にならないように厳選し、提示の工夫を行った
オンラインの利点を活かした 教材作成の工夫	教員にとって、科目・学群を超えて他の教員の授業を参考にできる可能性が広がった
	授業準備として、印刷の手間がなくなり、直前まで準備可能になった
	事前準備の時間は多くなったが、教員は自分が行った授業をオンデマンド配信による動画を視聴して客観視できる
学生の反応をすぐに授業改善へ 反映させる工夫	授業中に直接学生の反応が見えないため、レスポンスカードの記載内容をすぐ活用するようになった
	授業中に学生から遠隔上でもタイムリーな反応が得られるようにチャットツールなどを活用した工夫を行った

4. オンライン授業に関する課題（表 5）

オンライン授業の取り組みによる【新たな授業課題】として、「通信環境や学生の ICTリテラシーによって学生間の差が生じている」、「授業準備に従来の 3 倍以上の時間と教員が必要だった」があった。また対面授業からオンライン授業へ変更後も、学生の学修態度として【以前と変わらない学修に対する積極性の学生間の差異】がみられた。

表 5 オンライン授業に関する課題

カテゴリー	教員が感じたこと・思ったこと・教員の工夫など
新たな授業課題	通信環境や学生の ICTリテラシーによって学生間の差が生じていると感じた
	オンライン授業の準備として、従来の 3 倍以上の時間と教員が必要だった
以前と変わらない学修に対する 積極性の学生間の差異	教員と話したい学生はチャットツールを活用して質問することができていた
	対面授業でも課外学修をやらなかった学生はオンライン授業へ変更後も課外学修をやっていない様子があった

考察

1. 学修サイクルを活用したオンライン授業の利点

1) 反転授業による学生の学修効果

アクティブラーニングの一つの手法に、授業で行われていた知識の習得を事前学修で行い、授業では習得した知識を活用した発展学修を行う「反転授業」がある [2]。本取組みは、個人ワークと集団学修を組み合わせ一貫した学修サイクルを確立させたものであった。この学修サイクルは、授業に必要な知識の習得を個人ワークで行い、その後にグループワークを通して知識を活用した発展学修へと繋げていく構成となっており、反転授業の手法であったと考えられる。

忍田ら [3] は、反転授業の利点として、「時間と場所を選ばずに何度も繰り返して視聴でき、フレキシブルに学べる柔軟性のある学習プログラムである点」、「課題を通してこれまで得た知識とスキルを実践に活かせる点」、「より能動的な学びが求められることで学びやスキルが強化される点」があると述べている。本取組みで、学生の学修の様子から、教員は【学生が自分の理解度や学修スピードに合わせて主体的に学修できる】、【高齢者に対する観察力の向上】、【能動的に集団学修に参加する方法の検討と実施力の向上】と評価していた。このことはオンライン上での反転授業が実現できており、その利点が得られていたと考えられる。

反転授業は、「内容理解を深めるための予習の仕方が、授業内でのアクティブラーニングをより活発なものとする役割を担っている」とされている [4]。事前学修を行うことが前提であり、これに対し、アクティビティや事前ノートテイキングの導入により、学修に消極的な学生の参加意欲の向上や授業理解度向上に寄与する報告がある [5] [6]。本取組みでは、事前学修・事後学修の内容を明確化した個人ワークシートと、事前学修に対する解説の授業動画を取り入れたことにより、事前学

修を学修習慣の一部として位置づける働きかけはできていたと推測される。これまでの授業では、事前学修・事後学修の必要性を学生に説明していたが、学修方法については学生に委ねられ、教員からは個々の学修状況が捉えられない状況であったため、本取り組みによって学生の主体的な学修方法の支援に繋がったと考えられる。

また、集団学修では事前学修と授業動画の視聴を踏まえた課題を毎回提示することで、各段階が関連した授業となるようにした。小松ら [7] は、学生が思考・判断したことを自己表現し、グループメンバーや教員と協同で学修できる能力育成に向けて、能動的学修の促進には、「予習—講義・演習—復習」というパターン学修を促進させる教授方略が必要であると述べている。本取り組みでは、学修サイクルに沿って事前学修から事後学修までの過程を確立させたことにより、【能動的に集団学修に参加する方法の検討と実施力の向上】がみられたと考えられる。

しかし一方で、課外学習に対する積極性は学生によって差があり、以前と変わらないことが課題として抽出された。事前学修における基礎的知識の獲得は、発展学修の場である集団学修の基盤となることである。事前学修に消極的である背景として、グループメンバーに頼り、事前学修をしてもしなくても集団学修に支障がないと認識してしまった可能性も否定できない。事前学修が集団学修に参加する上で不可欠であることを実感できる工夫、基礎的知識の理解を支援する工夫をさらに加えることにより、学習意欲の底上げにつながると考えられる。

2) ICTを活用した老年看護学教育への利点

教員の評価にある【高齢者に対する観察力の向上】は、教材として超高齢者の日常生活動画を活用したことが関連していると推測される。老年看護学教育の特性として、学生にとっては高齢者を理解し、知識を活用して看護実践することの難しさがある。そのため対象理解を深めるために体験型の教材など、様々な工夫が行われてきた。その中で映像教材に対し、安川ら [8] は、高齢者の実態を映像とした教材は、学修意欲の向上や、看護師としての観察力を身に付ける教材となりうると述べている。また木島ら [9] は、映像の利点として、「映像を用いた事例提示は、事例への具体的なケアをイメージしながらアセスメントができる」と述べている。本取り組みでは、超高齢者の日常生活動画の視聴を学修サイクルに取り入れ、授業で習得した知識に関連させて学修する過程を繰り返した。これにより、学生が映像を通して、看護知識を活用して対象者を多角的に捉える能力の向上に影響できたのではないかと考えられる。

3) オンライン授業を実施していく上での教員の取り組み

反転授業を活かすためには、教員の授業全体を設計する能力が重要であるとされている [10]。本取り組みでは、授業の準備において、学生の集中力を考慮して動画時間を15分程度に決め、内容は必要最小限にまとめるよう意識するなど、【学生の学修意欲の維持を図る教材作成の工夫】があった。またオンラインにより、授業直前まで授業準備が可能となったことや、授業動画を通して教員は自身の授業について客観視できる点を利点と捉えて教材作成に取り組むなど、【オンラインの利点を活かした教材作成の工夫】があった。そして授業中においても、【学生の反応をすぐに授業改善へ反映させる工夫】を行っていた。学生の反応に速やかに対応できた背景には2点あると考えられる。まず、レスポンスカードの電子化により、その内容の集約作業効率が上がったことである。次に、グループワークの様子をチャット上の記載内容からも確認でき、困っていること等が把握しやすかったことである。以上のことから、教員と学生の双方向でのやり取りがしやすくなった。そして、教員と学生の双方向性が一因となり、学生が学修サイクルに沿って主体的・能動的な学修を行うことに繋がったと考えられる。

2. オンライン授業の取り組みに対する課題

オンライン授業の取り組みによる【新たな授業課題】として、教員は教材作成に対する労力が対面授業時以上に必要となると感じていた。

反転授業では、授業動画の作成において、学生の集中力も考慮し、必要最小限にまとめた教材作成が必要とされている [11] [12]。そのため、対面授業よりも準備を念入りに行う必要があり、本取り組みでも教員は【新たな授業課題】として、教材作成に対する労力がこれまでの授業準備以上に必要になると感じていたと考えられる。

授業準備に労力がよりかかる懸念がある一方、若林 [13] は、「専門性が高く、教員それぞれの裁量が強く反映される大学の高等教育では、個々の教員がビデオを作成するのが適している」ことを指摘している。大学で反転授業を行っていくために、授業準備は専門性の高い教員にとっては必要な労力であるが、本取り組みでも授業準備に従来の 3 倍以上の時間と教員が必要となったという教員の労力と負担の増大が課題として抽出されたことに対し、負担軽減の方策を今後も検討していくことは重要であると考えられる。

また本取り組みは、新型コロナウイルス感染拡大により急遽オンライン授業へ移行したことにより、通信環境による影響の他、これまで使用してこなかった複数の ICT を導入しての授業開始となったことから、学生の ICT リテラシーによって学生間の差が生じていると教員は感じていた。学生が学修に取り組む上での負担の軽減を目指し、活用する ICT の統一、または単純化する工夫が必要であると考えられる。

3. 今後の課題

本取り組みの振り返りから見えた今後の課題は、ICT 活用能力を高める教育の充実とコミュニケーション能力の強化である。

まず、ICT 活用能力の重要性について述べる。老年看護学教育の特性として、学生にとっては高齢者を理解することの難しさがある。そのため対象理解を深めるためにこれまでも様々な工夫してきたが、ICT を活用することの有用性は高いと考える。

また地域包括ケアシステム構築のためには、医療・介護の関係機関が連携し、他職種協働により住宅医療・介護の一体的な提供体制が必要である [14]。多職種連携のツールとして、パソコンの他、患者・利用者の在宅訪問では、医療・介護連携を進める上で、モバイル機器のニーズが高い状況 [15] などから、地域包括ケアでは ICT が不可欠といえる。つまり、学部教育から ICT 活用能力を高める教育は重要と考えられる。

次に、コミュニケーション能力強化の必要性について述べる。本取り組みでは、学修サイクルを活用したオンライン授業によって学生が主体的・能動的に学修に参加する様子があった。しかし集団学修の様子では、学生らは Teams の WEB 会議機能を利用してリアルタイムで意見交換をしている際、教員がカメラを活用して互いの顔が見える状態でグループワークを行うよう促すも、殆どの学生がカメラをオフにして顔が見えない状態でグループワークを行っていた。オンライン授業でチャットの活用により、学生からの質問が対面型授業よりも多くなったとの報告 [16] もあり、対面授業とオンライン授業で学生のコミュニケーション意欲に違いが出るのが推測される。

看護師に求められる能力の一つとして、看護実践におけるコミュニケーション能力があり、看護基礎教育におけるコミュニケーション能力の育成が重要とされている [17]。そして ICT の活用により、コミュニケーション能力の更なる強化が必要とされている [18]。ICT による新たなコミュニケーションスタイルが活性化する一方、看護師として専門的コミュニケーションを展開していくための能力開発を目指した授業方法について引き続き検討が必要であると考えられる。

また本取り組みでは、個人ワークは学生のタイミングで実施できることから、それぞれが自己の学修レディネスに合わせて進めることができていた。今後は、対面授業の再開にあたり、学修サイクルを 90 分の授業時間にどのように応用させていくかの検討が必要であると考えられる。

結論

コロナ禍で行った老年看護学のオンライン授業は、個人ワークと集団学修を組み合わせで一貫した学修サイクルを確立させたものであった。学生の学修の様子から、教員は学修サイクルを活用したオンライン授業の利点として、【学生が自分の理解度や学修スピードに合わせて主体的に学修できる】、【高齢者に対する観察力の向上】、【欠席者の減少】、【能動的に集団学修に参加する方法の検討と実施力の向上】があると捉えていた。

本取り組みで教員は、授業準備に対する【学生の学修意欲の維持を図る教材作成の工夫】や【オンラインの利点を活かした教材作成の工夫】を行っており、また授業中も学生の反応に速やか

に対応していた【学生の反応をすぐに授業改善へ反映させる工夫】を行っていたことにより、教員と学生の双方向性が一因となり、学生が学修サイクルに沿って主体的・能動的な学修を行うことに繋がったと考えられた。

一方、オンライン授業に関する課題として、【新たな授業課題】や【以前と変わらない学修に対する積極性の学生間の差異】があった。

今後、対面授業での学修サイクルを展開していくために運営方法について検討が必要と考えられる。

Acknowledgement

本研究は日本老年看護学会第26回学術集会の発表に加筆修正したものである。本研究に関する利益相反はない。

文献

- [1] 堀内ふき, 大淵律子, 諏訪さゆり, ナーシング・グラフィカ 高齢者看護の実践 老年看護学②, 株式会社メディカ出版, 2017, p 266-279
- [2] 中川潔美, 平良美栄子, 大学教育における反転授業の実践に関する文献検討, 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 2016, 2: p7-13
- [3] 忍田裕美, 能見清子, 小松法子, 今井淳子, 看護基礎教育における反転授業の研究動向と課題, ヒューマンケア研究学会誌, 2017, 8 (2): p43-50
- [4] 三保紀裕, 本田周二, 森明子, 溝上慎一, 反転授業における予習の仕方とアクティブラーニングの関連, 日本教育工学会論文誌, 2016, 40: p161-164
- [5] 近藤真唯, 教職課程における反転授業の活用と学習効果, 千葉商大紀要, 2015, 53 (1): p103-117
- [6] 坂口隆康, 反転授業モデルによるアクティブラーニングの可能性 情報機器活用に関する教職課程の授業を通じて, 教育総合研究叢書, 2016, 9: p131-144
- [7] 小松妙子, 村中陽子, 稲野辺奈緒子, 村越望, 田村かおり, 戸田すま子, 学生の能動的学修及び思考・判断の自己表現を促す看護技術教育の検討, 秀明大学看護学部紀要, 2020, 2 (1): p35-44
- [8] 安川揚子, 木島輝美, 大塚眞理子, 田中敦子, 丸山優, 奥宮暁子, 高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応, 札幌医科大学保健医療学部紀要, 2011, 13: p71-78
- [9] 木島輝美, 安川揚子, 高橋淳子, 奥宮暁子, 生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と看護過程演習への活用に向けての課題の検討, 札幌保健科学雑誌, 2014, 3: p35-42
- [10] 小川勤, 反転授業の有効性と課題に関する研究—大学における反転授業の可能性と課題—, 大学教育, 12, 2015, p1-9.
- [11] 中村文洋, 大星航, 小濱翔太, 行正信康, 上野一郎, 保健医療教育におけるアクティブラーニングとしての学生主導型授業および反転授業, 香川県立保健医療大学雑誌, 2018, 9: p9-14
- [12] 西屋克己, 住谷和則, 岡田宏基, 医学教育における反転授業トライアル, 香川大学教育研究, 2014, 11: p107-112
- [13] 若林則幸, アクティブラーニングの一手法としての反転授業, 口病誌, 2015, 82: p1-7
- [14] 地域包括ケアシステム, 2005, 厚生労働省.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
2021年7月21日閲覧
- [15] 地域における医療・介護連携強化に関する調査研究(地域包括ケアシステム構築に関するICT活用の在り方), 2017, 厚生労働省.
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12400000-Hokenkyoku/0000161932.pdf>
2021年7月21日閲覧
- [16] 岸美紀子, 鯉淵典之, コロナ禍での基礎系科目の講義・実習についての取り組みと課題, 日本生理学雑誌, 2020, 82 (4): p61-64
- [17] 長家智子, 看護学生のコミュニケーションに関する研究 - 生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて -, 九州大学医学部保健学科紀要, 2003, 1: p71-81
- [18] 看護基礎教育検討会報告書, 2019, 厚生労働省.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> 2021年6月9日閲覧